

操作ヲナサ、ルベカラズ第二ニハ血清診斷ハ多分積極反應ヲ呈スルモノナレド或ハ弱ク或ハ更ニ反應セザルコトアリ此場合ニハ數回反復検査ヲ行ハザルベカラズ

此二則ヲ標準トシテ病床上ニ利用セバ疑診ノ場合又ハ二種ノ熱性病合併スル場合ニ於テ大ニ鑑識ヲ助クルコトアルハ諸家ノ報告ニ乏シカラズ故ニ血清診斷ハ疑診ノ場合ニ必ズ之ヲ試ムルヲ以テ醫タルモノ、本分トナスベキ者ナランカ (完)

●兩側卵巢囊腫ノ一例

通常會員 吉川 砥直

余ガ茲ニ報告セント欲スル一例ハ恩師小川教授示教ノ下親シク實驗スルヲ得タルモノニシテ其稍々稀有ノ症タルガ故ニ不文ヲ顧ミズ敢テ同好諸氏ノ高覽ニ供スト云爾

患者 松本某婦、年齢二十六歳 酒店家族

明治三十一年七月十二日金澤病院婦人科クリニツクニ來リ診ヲ乞フ、

既往症 稟賦強壯大患ニ罹リシコトナク十六歳ノ三月初經潮來シ爾后整然トシテ亂レズ毎月經持

長三乃至四日ナリ、十六歳ニシテ嫁シ十七歳初メテ分娩シ后尙ホ二兒ヲ擧グ妊娠分娩產褥ニ異常ナク二男兒一女兒共ニ健存ス終産ハ二十四歳ノ時ナリキ

本病々歴及ビ現症 婁者三ヶ月前ヨリ下腹部膨大セルヲ知り爾來敢テ著シキ増大又ハ縮小ナシ而シテ食欲異常ナク便通ハ稍秘結スルノ傾アレ_レ隔日一行ナリ本年二月以來月經來ラズ六月ニ及テ再ビ現レタリト、

他覺的ニ之レヲ檢スルニ下腹一汎ニ膨大シ大人頭大ノ瓢狀ナル波動アル一腫瘍ヲ觸知ス而シテ腫瘍ハ自由ニ移動スルヲ得_レ右下方ニ向テハ稍牽制セラル測診スルニ臍部腹圍八〇仙迷胸骨劍狀突起ト臍ノ距離二〇仙迷臍ト耻骨縫際ノ距離一五仙迷ナリ内診スルニ子宮ハ柔軟ニシテ浮腫狀ニ肥大セリ

診斷 卵巢囊腫

經過 爾后諸症著明ノ増減ナク七月以降十月マデ經通アリ十一月二十一日患者ヲ論シテ入院セシメ二十五日開腹術ヲ行フニ決ス

手術記事

十一月二十五日手術準備式ノ如ク婦人科防腐手術室ニ於テ開腹術ニ着手ス、術前脈搏百十六至、呼吸數二十二、体温三十七度

魔酔藥トシテ午前十時五十二分ヨリ「クロルホルム」吸入ヲ行ヒ他ニ「モルヒン」一筒ヲ注射ス而シテ十一時〇三分ニ至リ全ク深魔酔ニ陥ル、魔酔后脈搏七十五至呼吸數三十五、

先ツ腹部ノ状態ヲ見ルニ衣服上ヨリ己ニ腹部大動脈ノ搏動ヲ觸知スルニ足り腹部膨大ノ頂点胸骨水平面ヨリ高キ丁約一仙迷ナリ腫瘍ハ大動脈ノ搏動ニ從テ躍動シ以テ腹部大動脈ノ直上ニアルヲ知ラシム、

十一時十五分小川教授刀ヲ執テ先ヅ臍下二仙迷ノ部ヨリ白條ニ沿テ腹壁ヲ開ク丁十仙迷皮下脂肪層著シク厚クシテ黃色ナリ創口ヨリ手ヲ腹腔内ニ挿入スルニ術前放尿セシメタルニ關セズ膀胱充滿スルガ如キ感アリ依テ直チニ尿道ニ「カテーテル」ヲ挿シテ排尿ヲ計リシト雖トモ僅ニ微量ヲ漏ラスニ過ギズ茲ニ於テカ教授ハ再ビ一手ヲ腹腔内ニ進メテ細探セラレシニ果然囊腫ハ二個ナリキ先キニ膀胱充滿ト思ヒシハ實ニ一方ノ卵巢ノ囊腫ナリシナリ是ヨリ先ヅ左方ノ腫瘍ノ頸ヲ求メテ之レヲ檢スルニ廣クシテ薄ク且ツ内方ニ凡ソ半回捻轉セリ十一時二十七分套管針ヲ以テ穿刺シ内容ヲ漏ラス内容ハしるこ汁様ナリ次デ之ヲ腹壁創外ニ牽出スルニ毫モ周圍ニ癒着ナシ頸ハ分結紮三總結紮一ヲ施シテ剪彩ト共ニ全ク剔出ス十一時四十分右側ノモノニ着手スルニ前者ト同ジク癒着ナクシテ頸ハ廣ク且ツ内方ニ凡ソ一回捻轉セリ四十三分套管針ヲ以テ穿刺スルニ水様透明ノ内容液流出ス次デ腹創外ニ牽出シテ頸ヲ分結紮四總結紮一ヲ以テ結紮シ五十二分全ク剔出ヲ終ル、腹壁創ノ縫合ヲ初ムルニ先ヅ創口ニ於テ結紮糸ヲ切ル丁右四左三ナリ腹創縫合ハ深縫合六淺縫合五ヲ施シ茲ニ於テ手術全ク終レバ十二時五分ナリ、

手術時間五十分、クロルホルム消費量三十五瓦 手術中室温攝氏二十三度

附言 本患者手術中腹内温度ノ頗ル高キヲ感セシガ術后二日ニシテ月經潮來ニ遭遇ス蓋シ腹内温ノ高カリシハ之レガ爲メナリシト思ハル何トナレバ本患者月經ハ毎月二十五六日ヨリ來ルヲ例トシ手術前ノ經過ハ十月二十六日ヨリ三日間ナリシヲ以テ見レバ今回ノ月經モ正常ナル時期ニ來レルモノニシテ手術ノ刺戟ニヨリテ潮來セルモノニ非ザルヲ明ナレベナリ

術后經過 佳良ニシテ暫時ノ后魔醉ヨリ醒覺シ二日後即チ二十七日ヨリ少量ノ月經三日間持續セリ十日ニシテ腹壁縫合糸ヲ拔去スレバ創面清潔ニシテ第一期癒合ヲ以テ治セリ其他經過中三日間三十八度以下ニ於ケル体温ノ昇降及ビ尿利頻數ヲ來シ尿道痛アリシノ他記ス可キ異常ナク二週ヲ經テ患者欣然トシテ院ヲ去レリ、

剔出シタル囊腫ノ性質及ビ一二ノ成書參照

本患者ニ於テ剔出シタル兩個ノ囊腫ニ付テ檢スルニ左方ノモノハ小兒頭大ニシテ内面ニハ多房ガ破裂セル痕アリテ衣囊狀ヲ呈ス蓋シ囊内液ノ血樣性ヲ帶ビタルハ房隔壁破裂ノ際ニ出血セルニ由ルナラン又囊壁ニハ所々石灰沈着ヲ起セル部分アリ右方ノモノハ左方ノモノヨリ稍小ニシテ壁薄ク全然タル單房性ナリ是レガ内壁面ニハ然レハ凝血ヲ含メル鴉卵大ノ一小囊腫ヲ附着セリ、今吾人ノ實驗ガ稍稀有ナルヲ証センガ爲メ左ニ「ピルロート」及ビ「リュック」氏ノ婦人病學ニ於テ同

時ナル兩側卵巢剔出術ヲ一條下ニ氏等ノ特論セル一節ヲ抄譯シテ掲ケンニ曰ク

兩側卵巢ハ同時ニ腫瘍ヲ生ズルイアリ而シテ其最大多數ハ惡性腫瘍或ハ惡性ニ近キ乳嘴腫ナリ然レモ良性腺性囊腫及ビ皮様囊腫モ屢々兩側性ナルヲ見ル又惡性腫瘍及ビ乳嘴腫ハ同時ニ兩側ヲ犯スノミナラズ兩側始ド同度ナルヲ常トスレモ良性腺性囊腫ニ於テハ此ル事ハ除外例ナリトス、

次に統計ヲ示シテ曰ク St. Koles. ハ前五百例中二十五后五百例中五十七ノ兩側性腫瘍 Keith ハ前二百二十九中十三后六十九中九 Baker. Brown ハ四十二例中三ヲ實驗セリト更ニ一表ヲ掲ゲテ諸家ノ報告ヲ集メタリ即チ、

術者名	總卵巢剔出術數	兩側剔出數
(Karlbraum)	84	6
(Krasowski)	128	21
(A. marlin)	104	19
(Tautfer)	59	14
(Thorotni)	130	32
(Howitz)	62	9

尙ホ「シユロイデル」氏ハ曰ク兩側卵巢囊腫ハ乳嚙性ノモノ最多ニシテ皮様囊腫之レニ次ク但シ余ノ見ル所ニ從ヘバ腺性囊腫ノ兩側ニ來ルコトモ世人ノ信ズルヨリハ多キガ如シト

以上ノ記載ニヨリテ考フルニ余輩ノ本例ハ兩側ノミナラズ同度ノ腺性囊腫ナレバ或ハ幾分ノ興味アルモノナランカ

●長掌筋及びヒ上膊動脈ノ異常一例

〔承前〕

飯塚 忠 男

上膊動脈ノ高處分枝ハ又々次ノ如ク現ハル、トアリ

即チ一ハ小ニシテ一ノ分枝スルナク常位ニアリ或ハ通常ノ如ク分枝シテ総骨間動脈トナリ一ハ大ニシテ下行シ更ニ橈骨動脈及ヒ尺骨動脈トナル此ノ如キキハ骨間動脈ノ高處分枝ト見做スベキモノナリ此ノ骨間動脈ノ高分枝ハ六百屍千二百ノ腕中百〇三ノ變体中五回其ノ内二回ハ腋窩動脈三回ハ上膊動脈ヨリ分枝セリ

又々上膊動脈ハ肘關節窩ノ部ニ於テ三分シテ橈骨動脈尺骨動脈及ヒ総骨間動脈トナルトアリ

●原著及實驗